

く、軽自動車とバイクが目立って多い。起伏に富んでおり、典型的な漁村集落が形成されている。昼食後、隊列を組んで島を一周したが、距離の割にハードなものであった。(これは起伏のためばかりではない。島の人に高校生に見られた私達であったが、栗原先生の健脚についていくのに必死だったのである。)来てよかった、と感動した。夕食の後、観光協会の方から、妻問い婚や若い衆宿、伊勢神宮への鯛の奉納など民俗学的なことか

ら、現在の観光開発に伴う問題まで、いろいろな話を伺った。離島独特の生活というものを感じた。

見学内容はもちろんのこと、最後の夜の盛大な反省会、最終日には駅のホームで千円札が風に舞うなど、エピソードにも事欠かぬ充実した巡検であった。

(7月14日～17日 三上・栗原教官指導)

新潟巡検

多田 恵美子

上野で上越新幹線に乗り、約2時間。列車はあっという間に、新潟駅のホームにすべり込んだ。私達3年生19名は、井内先生の御指導のもと、3泊4日の新潟巡検へと出かけたのだった。10月5日、天気は快晴。初日は、山の下排水機場見学でスタート。ここは外水(信濃川)と内水(通船、栗の木川)の2mもある水位差を閘門で調節して、通船させる所だ。折良く、南洋からのラワン材を運ぶ筏が来たので、低水位方式で自動的に船が通過するのを見ることができた。水は低い方へ流れる、という簡単な原理ではあるが、この方法を発見した人の賢さに皆が感心させられていた。

次は、新潟大学へ。「佐渡わかめ、いからし干こは砂だらけ」と土地の民謡にうたわれた新潟砂丘上の五十嵐という所に、広大なキャンパスを構えている。地理学教室の高津先生に、新潟の都市化と工業について、話を伺った。長岡藩の外港として開発された新潟市も、近年、上越新幹線の開通や、大型デパートの進出などで、ますます都市化が進んでいるようだ。まず新潟県の概要をつかんでしまおうという意気込みの為、皆、熱心にノートをとっている。最後に、先生が成田にかわる国際空港が新潟にできるだろうと、力説していたのが印象に残った。

2日目。建設省の方が用意してくださったマイクロスコープで出発。まず、新潟県の海岸浸食と地盤沈下の状況を見る為、日和山公園へ。明治22年に降、平均160mも汀線が後退し、又、旧新潟測候所

も海中に没してしまい今は、跡形もないそうだ。海中に2本の長いコンクリートの棒が揺れて見えたが、これは地盤沈下で突堤が沈んだものだった。原因は水溶性天然ガス採取に伴う大量の地下水揚水によるものらしい。沈下の状況をこのようにはっきり見たのは初めてだった。「海は荒海、向こうは佐渡よ」といわれた日本海も初秋のせいかわかぬが、さほど広くない砂浜が、ずっと向こうの新潟西港まで続いていた。次は大河津分水資料館。ここでは、洪水の記録や分水路建設の記録を見た後、屋上から分水路を見学した。巨大な可動堰や洗堰も今はすべて、コンピューターで集中管理されているという。ボタン1つで川の水量を変えてしまうのだから科学技術の力とは、すごいものだ。午後は燕市の役所へ行き、金属洋食器などの地場産業についての説明を受けた。朝からのハードスケジュールの為か皆、大分疲れていて眠そうだったが、帰る時に頂いたスプーンセットだけは、しっかりと抱え込んでいた。

3日目は、新潟県庁へ。新潟平野の土地改良や地盤沈下、信濃川の整備、地場産業の現状と問題点、観光についてと各項目ごとの詳しい説明を聞いた。前日までの調査や話と重複する部分もかなりあり、よりいっそう新潟県への理解が深められた。午後は各班ごとに新潟市南部で、農業集落調査を行った。見知らぬ家への訪問にとっても緊張したが、農家の方は親切で、質問に嫌な顔せず答えて下さった。「昔は湿田に苦勞し、今は減反で苦

労している。農家は楽でねえ」という言葉が強く心に残った。夜は自分達が訪ねた家の情報交換で大賑わい。建設省の方にいただいた幻の名酒、越の寒梅で、少し早いけれども今回の巡検の成功を祝い乾杯し、夜の更けるのも忘れて語り合っていた。

いよいよ最終日、班別テーマに基づく調査。4月からゼミで学んだことを、実際に自分の目で確

かめようと皆、意気込んで出かけて行った。

今回の巡検は、半年近い準備期間もあり、今までの巡検とは違った厳しい態度で臨むことができた。新潟県の方々からは大変厚い御好意を受け、3年生の巡検は無事終了した。10月8日、私達は水の街をあとに東京へと向かった。

(10月5日～8日 井内教官指導)



中国・敦煌の莫高窟（東山セツ子氏画）